

(続紙 1)

京都大学	博士（教育学）	氏名	戸松 幸一
論文題目	近代「浪人」の知識社会学 —古島一雄（1865-1952）の政治と言論—		
(論文内容の要旨)			
SNS のメディア戦略が選挙および政策決定の過程に大きな影響を及ぼすようになった昨今、民主政治および議会政治とメディアの関係性について大きな関心が寄せられている。本論文は日本の近現代にかけて活動した新聞記者出身の議員・古島一雄を取りあげ、その新聞記者および政治家としての横断的なキャリア形成に注目するとともに、古島に特徴的な日本近代における「浪人」的な性格を解き明かし、近代日本における政治活動とメディア言説の関係とその変容の様態に光をあてる試みである。 序章では、明治大正期の「浪人」をめぐる概念を整理しながら、古島一雄の浪人としての性格や位置づけを検討する。本論文が対象とする「浪人」概念は実在する社会層であると同時に理想化された政治主体像であり、新聞雑誌上に現れた言説でもある。この様態を明らかにするために、本研究はメディア論における「政治のメディア化」理論を参照しつつ、古島の思想および政治行動を知識社会学的な視座から考察する。 第1章では古島の若年期に着目し、古島が経験した「学校」と「塾」の学習経験の関わりや、これらを利用したキャリアへの接続から、古島の「浪人」的な人格形成に果たした教育の役割を考察する。 第2章から第4章は古島の新聞記者のキャリアに光を当て、明治期の政論新聞記者や、これを取り巻く言説空間の「浪人」的な性格を浮き彫りにする。また古島の従軍記や担当したコラム「雲間寸観」に着目し、明治期の言論メディアと政治の関係性を、「浪人」という概念から捉えなおす。 第5章と第6章では古島の政治家としてのキャリアに注目する。古島は当初「浪人会」という団体の後援を受けて出馬した。その後、立憲国民党に所属し、犬養毅の「懐刀」として政治活動を行った。また古島は「金力」と「情実」を排した「理想選挙」を広く訴えた。「輿論」を指導し、大衆運動を巻き起こして政治的な力とする古島らの政治運動は一定の奏功を見たが、実現した普通選挙で古島は敗北し、衆議院議員の議席を失うことになった。近衛文麿を「決断なき聡明」と切り捨てつつ、反戦運動を推進した吉田茂の「野猪的」な行動力を高く評価した古島は、終戦を迎えて日本国民が「骨抜き」になってしまうことを危惧し、あくまで「浪人」的な反骨精神を重視した。 終章は古島の晩年を俯瞰したうえで、古島を中心とした「浪人」的なエートスについて総合的に考察する。古島は政党に足場を置きつつ、党利党略に奔走することを誠めながら、超党派的な「工作」を得意とした。また古島はメディアを駆使し、「輿論」に訴え、これを喚起することに成功しながら、そこから生まれた民情、すなわち「世論」に裏切られることとなった。アジア主義的な思想傾向や反官僚的なパーソナリティは、近代「浪人」の社会的および世代的な基盤に立脚していた。これまで、近代における「浪人」は日本におけるウルトラナショナリズムを進行させた一因とされてきたが、その在野的なエートスは民間からの政治参加のあり方の一形態であり、一面的な価値判断で断罪することには限界があることが明らかになった。			

(論文審査の結果の要旨)

明治期から第二次世界大戦頃までの日本社会では「浪人」を自認する人々が一定の存在感を有していた。それは、政治思想や動向の面で特徴的な社会層であった。本論文は、「浪人」の人的ネットワークの中心付近に位置し続けた古島一雄に注目しながら、「浪人」的なエートスの在り方を知識社会学的に明らかにしたものである。

特に古島一雄について、明治期の私塾教育を経て、新聞記者から議員に至る生涯の全体像を検討対象としている。古島の近代「浪人」としての一つの典型的な学歴・キャリア・政治思想的傾向を分析するために、「政治のメディア化」にかかわるメディア論を枠組みとして採用している。

本論文の意義として、次の四点を指摘することができる。

第一に、志士的で、反官僚的な「浪人」エートスを具体的に解明し、それが明治期以降の新聞の変遷や、藩閥政治から政党政治への移行と関わる形で存在していたことを示した点である。特に、丸山眞男らによって「浪人」的な精神性は超国家主義を成立させたものの一つと位置付けられていたが、それとは明確に異なる種類の「浪人」の在り方を解明した本研究は、政治思想史的な理解の深化に寄与している。

第二に、「政界の黒幕」と呼ばれた古島一雄を対象にした初めての評伝的学術研究として完成させたことに伴う、方法論的な意義である。その政治家としての性格に起因して、表舞台で活躍した政治家のように注目されず、必ずしも豊富な一次史料が残されているわけではなかった。その制約をメディア史的なアプローチで乗り越えた本研究は、新たな学術研究の地平を切り拓く重要な業績として位置付けられる。

第三に、今日に続く記者コラムが新聞の官僚化と距離を置いた「浪人」的なものとして発生したことを明らかにしている点である。これは日本の新聞文化に特有の現象の初期の展開を解明した点において、メディア史に対する重要な貢献である。

第四に、明治期の私塾が、「浪人」に接続する漢文の素養や志士的な精神性の涵養に寄与しただけではなく、キャリア形成に資する人的資本と関わっていたことを示した点である。これは、明治期の近代学校制度の外側にある教育機会の多彩な機能に踏み込むものとして、教育史に貢献するものである。

以上の意義を踏まえると、本論文は近代社会への適応の一形態を明らかにした、学際的なインプリケーションを内包する研究として高く評価できる。残された課題として、古島とは異なる「浪人」の在り方や、「浪人」の社会的な位置づけとその変化についてはなお十分に論じられていないことも自覚されている。

このような成果と関連して、本論文の質疑では以下のような疑問点や改善を要する点も明らかになった。古島の位置付けを明確にするために、同郷の私塾出身者や他の政界の指南役との比較を意識したり、アジア主義をはじめとした日本史研究に目配りしたりすることもできたのではないかな。古島と他の「浪人」との関係性を掘り下げる必要があったのではないかな。「浪人」の在り方を析出することが、教育史やナショナリズム研究などの領域にどのような視座を与えるのかを意識的に提示する必要があったのではないかな。「官僚」の対概念としての「浪人」という観点から、二つの概念の変遷を対比しつつ議論全体を構成できたのではないかな。民衆から支持を受けた在野精神を肯定的に捉える解釈には、近年の日本史研究の知見とは異なった形で理想化された戦後の価値観が前提となってしまうのではないかな、などの指摘があった。

ただし、これらは、必ずしも本研究の欠陥のみを示すものではない。これらは独創的な視点で問題設定されたがゆえに、事後的に見いだされた課題であり、今後に予定されている研究の中でさらなる発展が期待できる。

したがって、こうした指摘は、本論文の博士論文としての価値をいささかも減ずる

ものではない。よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和 8 年 2 月 19 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定の間) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降